

## 〔報告〕

## 妊娠期から地域・病院・多胎児サークルが協働して行う多胎児支援

名 和 文 香<sup>1)</sup> 服 部 律 子<sup>1)</sup> 布 原 佳 奈<sup>1)</sup> 宮 本 麻 記 子<sup>1)</sup>  
 武 田 順 子<sup>1)</sup> 谷 口 通 英<sup>1)</sup> 坪 内 美 奈<sup>2)</sup> 両 羽 美 穂 子<sup>3)</sup>

**Support of Multiple Pregnant Women and Families in Partnership  
with Community, Hospital and Support Group**

Fumika Nawa<sup>1)</sup>, Ritsuko Hattori<sup>1)</sup>, Kana Nunohara<sup>1)</sup>, Makiko Miyamoto<sup>1)</sup>,  
 Junko Takeda<sup>1)</sup>, Michie Taniguchi<sup>1)</sup>, Mina Tsubouchi<sup>2)</sup>, and Mihoko Ryoha<sup>3)</sup>

## I. はじめに

近年、体外受精や顕微授精の発展に伴い、多胎妊娠率は増加しており、1996年には、出産千に対し9.3であったが、2005年には11.8、2006年には11.6と増加している<sup>1)</sup>。岐阜県においても、多胎児出産は増加しており、出産千に対し2005年には13.3、2006年には14.8と全国平均を大きく上回っている<sup>2)</sup>。妊娠期には、異常の発生率も単胎妊娠に比べ高く、ハイリスク妊娠として注意が必要であり、周産期死亡率も単胎に比べると高い<sup>3)</sup>。さらに、多胎妊婦は、単胎の場合と比較すると、妊娠期から不安が高く、育児期には、多胎児の育児の大変さから<sup>4, 5)</sup>、心身ともにストレスが高くなり<sup>6)</sup>、育児に対する不安も高まる<sup>7)</sup>と言われている。多胎妊婦とその家族は、経済的な負担や、不十分な公的支援、多胎児情報の乏しさ、育児が忙しいことによる身体面での負担やストレスによって、精神面に関しても負担が重なるなどの悩みを抱えていると報告されており<sup>8)</sup>、これらが多胎児家族のストレスや不安を増強させている。

近年、育児期をはじめ、多胎妊婦同士が交流を求める割合は高く<sup>9)~12)</sup>、多胎児のサークル活動も盛んに行われるようになってきた。病院で行われる多胎妊婦教室も徐々にみられ、多胎妊婦のニーズも高い<sup>13, 14)</sup>が、地域が主体となって開催する、多胎妊婦とその家族を対象にした教室はまだ少ない。

岐阜県が多胎児支援の動向として、2006年に「ぎふ多胎ネット」が発足したが、これは、妊娠期からの多胎児家庭へのアプローチの必要性から、多胎育児経験者(支援者)が、行政職・医療関係者・研究者とネットワークを組み、支援するという趣旨のもと設立された組織である。主な活動は、多胎児サークルの運営に関する情報交換、各自治体での多胎児家庭への支援の情報提供、サークルのない地域への支援、多胎児家庭への訪問・妊婦訪問・病院訪問などである。この組織は、岐阜県内の多胎児サークルで構成されているが、その内1つの多胎児サークルメンバーが行ってきた多胎妊婦に対する病院訪問が発展し、本報告での多胎児教室開催が取り込まれるようになり、この取り組みにサークルメンバーも協働している。

このように、支援は活発になってきたが、多胎分娩件数が増加している一方、地域による取り組みが様々であり、妊婦にとって十分な支援に至っていない地域もある。岐阜県においては、多胎児の出生数は地域差が大きく、市町村毎に多胎児サークルを作ることや、市町村単位での支援はより難しくなっている<sup>15)</sup>。多胎児支援は、本学の共同研究として、以前より取り組んでおり、妊婦とその家族のストレスや不安が増強しやすいという課題に対して、ストレスと不安が増強せず、育児期を迎えることができることを目的とし、情報提供の方法や交流の場

1) 岐阜県立看護大学 育成期看護学講座 Nursing in Children and Child Rearing Families, Gifu College of Nursing

2) 岐阜県立看護大学 地域基礎看護学講座 Community-based Fundamental Nursing, Gifu College of Nursing

3) 岐阜県立看護大学 機能看護学講座 Management in Nursing, Gifu College of Nursing

をどのように設けるかについて、行政と医療機関、多胎児サークルで話し合いがもたれてきた。その中で、行政とサークルが協働して行う支援の重要性<sup>16)</sup>が明らかになり、共同研究者の保健師が所属するA市保健センターが主体となって、2005年に、多胎児教室である「双子のプレママパパ教室」を開催し、行政、医療機関、多胎児サークルが連携した取り組みが始まった。そこで、今回、多胎児教室開催の経緯と取り組み、その協働体制について検討した。また、多胎妊婦とその家族に対して、多胎児教室に対する意見を質問紙にて調査し、今後の多胎児教室のあり方について検討したので報告する。

## II. 「双子のプレママパパ教室」開催の経緯

### 1. 開催までの経緯と年次毎の取り組み、および協働体制

岐阜県の、B保健所が管轄する3市（A市を含む）と、C保健所が管轄する2市（A市の近隣）の計5市は、D地区と呼ばれており一つの医療圏である。A市は、5市の中で中核を担っている。本学は、D地区の周産期医療の中核病院であるE病院と共同研究を進める一方、多胎児サークルのネットワーク構築に取り組んできた。その頃、D地区で活動していた多胎児サークルのメンバーが、E病院に入院中の多胎妊婦を訪問し交流を図るようになった。これは、サークルメンバーがピアサポーターの役割を担い、妊娠中や育児期の経験談などを話すことによって、イメージ作りを図ること、サークルなどの宣伝も兼ね、育児期における孤立化を防ぐといった意図があった。さらに、多胎児サークルはA市保健センターから、サポートを受けており、行政と医療機関、多胎児サークルが連携し、A市保健センターが主体となって、多胎妊婦とその家族を対象とした多胎児教室を試みることに計画された。この教室では、主に、妊娠や分娩、育児をイメージできること、多胎妊婦同士や家族の交流を図ること、情報交換や悩みなどの共有、ストレスの軽減を目的としている。また、E病院の助産師、本学教員もアドバイザーとして参加することになった。多胎児教室は、年に2回開催しているが、参加者は妊娠中に1回参加している。

平成17年度（1回開催、1回目）：岐阜県では、多胎妊婦を対象とした教室、さらに、その家族を対象にした

教室は、未だ前例がなかったため、開催に向けて、A市保健センター保健師とE病院助産師・看護師、多胎児サークル、本学教員が開催についての周知方法、運営方法、プログラム内容、役割について話し合った。周知方法については、A市保健センターが管轄するA市のみならず、他の4市の保健センターにも呼びかけ対象者を募った。方法として、母子手帳配布時や妊婦健診時に、個別に案内をするようにした。運営に関しては、A市保健センターが主体となり会場設営に当たった。プログラム内容や役割については、個々の専門を活かしたアドバイスができるようテーマを決め、できるだけ多くの情報が正確に伝わるよう工夫した。また、該当する参加者がいる市の保健師も参加した。

平成18年度（2回開催、2～3回目）：前年に行った教室は、対象者からの反響も大きく、教室の必要性が再認識されたため、年に2回の開催を試みた。前年と同様、A市保健センターが中心となり、D地区の保健センターと協力し参加を促した。また、プログラム内容は前年と変更はなく、運営については、前年通り協働しD地区保健センターの保健師と情報交換を行った。

平成19年度（2回開催、4～5回目）：引き続き、A市保健センターが中心となり、教室を2回開催した。プログラム内容と運営については前年と同様であった。しかし、教室開催の中心となる、A市保健センターが管轄するA市の対象者の参加が全くなかったため、教室を開催してきたメンバーと、B保健所およびC保健所、5市の保健センターで検討会を設けた。その結果、教室の開催や運営に当たっては、単独の市町村だけでなく、広域の市町村が協力し支援を行っていく必要があるという意見で一致した。今後は、B保健所が中心となり、広域の多胎妊婦とその家族を対象とすること、開催場所は5市で持ち回り制とし、それぞれが協力し合い開催していくことになった。

### 2. 教室の趣旨

趣旨は、以下の3点である。

- 1) 妊娠中から、分娩や育児など正しい情報を得てイメージすることができる。
- 2) 多胎妊婦同士、また家族の交流を図り、情報交換や悩みなどの共有、ストレスの軽減につなげることができる。

- 3) 地域・病院やサークルが協働し、地域全体で多胎児支援を行うことによって、情報を共有でき、いろいろな角度から支援することができる。

### 3. 教室開催の時期と日程

年に2回とし、夏（6月頃）と冬（12月頃）に行った。開催の曜日は、土曜日または日曜日とし、時間は、午後で約1時間半から2時間以内とした。

### 4. 参加スタッフ

参加したスタッフは、A市保健センター保健師、E病院助産師・看護師、D地区保健センター保健師、B保健所保健師、多胎児サークルメンバー、本学教員であった。

### 5. 教室のプログラム

以下のプログラムに沿って運営した。

- 1) 教室の趣旨と今後の支援についての説明（保健師）
- 2) 自己紹介（参加者全員）
- 3) 妊娠中の日常生活の過ごし方、分娩と入院生活の説明（病棟助産師、本学教員）
- 4) 育児・授乳・沐浴などの工夫についての説明、多胎児サークル紹介と育児体験（多胎児サークル）
- 5) 教室終了後、交流会と質疑応答（参加者全員）

平成17年度から19年度の計5回の教室は、上記のプログラムに沿って開催した。教室運営の流れは、A市保健センター保健師またはB保健所保健師が、司会進行を行い、教室を取りまとめた。その際、教室開催の目的と意義について説明した。教室の始めには、スタッフと参加者全員が自己紹介を行い、参加者から、現在心配なことなどを聞きながら、話しやすい雰囲気を作った。その後、本学教員が、多胎妊娠の概要と、妊娠中の日常生活の過ごし方、育児期の過ごし方などについて、手引きに沿って説明し、E病院助産師は、分娩や入院生活など、病院で実際に行われている様子を具体的に説明した。多胎児サークルは、紙芝居形式で、サークルが行っている活動や、育児期の工夫点や、エピソードなどを話し、参加者からは色々な質問が出てきた。最後に、プレママ、プレパパに分かれ、それぞれサークルのママパパ先輩から、経験談を聞いたり質問する時間を設けた。

### 6. 教材

本学で作成した冊子「ふたごの妊娠・分娩・育児の手引き」を教材として使用した。教材の内容は、多胎妊娠の概要、多胎育児の概要、体験談、アンケート調査結果、

サポートシステムの紹介などである。

## Ⅲ. 方法

### 1. 調査対象および調査方法

「双子のプレママパパ教室」に参加した妊婦およびその家族に対し、質問紙調査を行った。この質問紙は、A市保健センターが、参加者の教室に対する意見を参考にするために作成したものであり、研究として報告することの了解を得ている。参加者には、教室終了後に配布し、その場で記入してもらい回収した。

### 2. 調査内容

調査項目は、「育児において、夫以外の協力が得られるか」（多項選択法）、「育児における夫以外の協力者」（無制限複数選択法）、「教室の開催を知ったきっかけ」（多項選択法）、「教室に参加した満足度」（評定法）、「知りたい内容は含まれていたか」（多項選択法）、「将来サークル活動に参加したいか」（2項選択法）、「教室後の交流会についての意見・感想」（自由記述法）、「行政やサークルへの意見・要望」（自由記述法）等である。

分析方法は、選択法の回答は単純集計を行い、自由記述法は記述内容にしたがって分類した。調査期間は、平成17年12月～平成19年12月であった。

### 3. 倫理的配慮

本取り組みは、本学の研究倫理審査部会での承認を得ている。研究として報告することの了解については、自由意思であること、個人は特定されないことなどについて、文書を用い説明し、同意書の提出により同意の有無を確認した。また、A市保健センターと質問紙のデータを共有するためにコピーを取り、データは大学研究室内で保管および処理した。

## Ⅳ. 結果

### 1. 対象の概要

「双子のプレママパパ教室」の参加者は、47名（妊婦26名、夫19名、祖母2名）であった。教室参加人数の内訳は、平成17年度（1回開催）：妊婦とその夫9組、妊婦とその祖母1組の計20名、平成18年度（2回開催）：妊婦とその夫6組、妊婦とその祖母1組、妊婦のみ4名の計18名、平成19年度（2回開催）：妊婦とその夫4組、妊婦のみ1名の計9名であった。回収率お

よび有効回答率は、妊婦が26名(100%)、夫が15名(78.9%)、祖母が1名(50.0%)であった。

回答者の年齢は、妊婦は、20代が9名(34.6%)、30代が17名(65.4%)、夫は、20代が2名(13.3%)、30代が8名(53.3%)、不明が5名(33.3%)、祖母は50

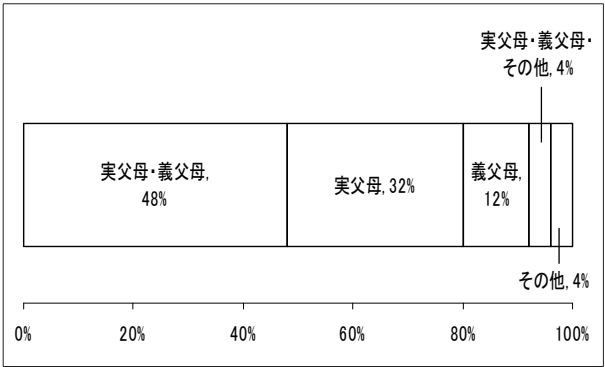


図1 育児における夫以外の協力者 (n=25)

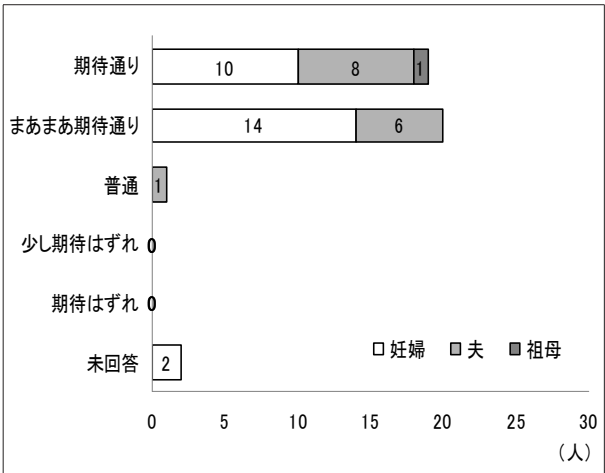


図2 教室に参加した満足度 (n=42)

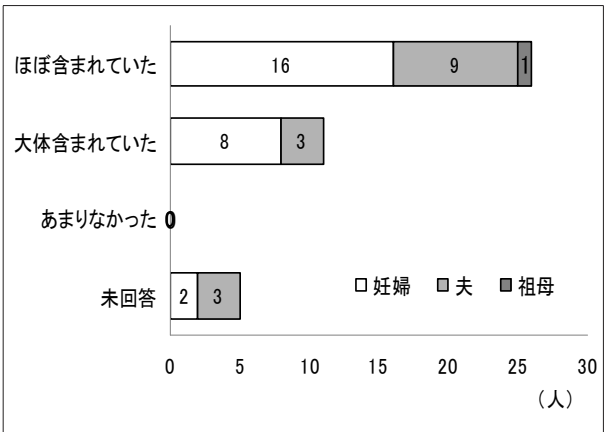


図3 知りたい内容は含まれていたか (n=42)

代が1名(100%)であった。

妊娠週数は、12～32週(n=26)であった。

育児の協力者について、「育児において、夫以外の協力が得られるか」という質問は、妊婦の26名中、25名が【得られる】と回答していた。また、「育児における夫以外の協力者」は、12名(48.0%)の妊婦が【実父母】【義父母】の両方と回答していた。(図1)

2. 「双子のプレママパパ教室」について

「教室の開催を知ったきっかけ」は、妊婦の多くが、【保健センターからのチラシ】【病院で勧められた】と回答しており、夫の多くは、【妻に誘われた】と回答していた。(表1)

「教室に参加した満足度」は、参加者のほとんどが、【期待通り】か【まあまあ期待通り】と回答していた。(図2)

表1 教室の開催を知ったきっかけ (n=42)

内容	妊婦	夫	祖母	(人数)
保健センターからのチラシ	13	3		
病院で勧められた	7	2		
保健センターからのチラシ	4			
および病院で勧められた				
市役所で紹介された	1	1		
多胎児サークルからの紹介	1			
妻に誘われた		8		
娘に誘われた			1	
未回答		1		

表2 教室後の交流会についての意見・感想 (n=42)

(妊婦)	人数
いろいろな話が聞けて良かった	8
実際に育てられた方のアドバイスが心強かった	3
先輩ママやパパの話が参考になった	3
今までより少し不安がなくなり、「どうにか育てていけそうだなあ」という気持ちになった	1
産む前にいろいろな心がまえができて、良かった	1
とても楽しかった	1
普通の母親学級では、単胎のことしかわからなかったのが、大変さもわかったが、現実的に考えられるようになった	1
双子のお母さんお父さん、専門機関の方のお話がとても役に立った	1
もっと多くの情報(時間もないので、レポートにまとめたものをいだけたりすると嬉しい)が得られたら良い	1
覚悟はしていたが、生の声を聞いて思っていた以上だった	1
妊娠中のママだけの限定の方が話しやすいのではないかと	1
未回答	4
(夫・祖母)	人数
体験された方の生の声が聞けてとても参考になった	7
出産、子育てに対してあらためて妻に協力しようと思った	2
なんとかなりそうな気がした	1
男性の場合の話が聞くことができて良かった	1
双子ならではの話も聞くことができて良かった	1
未回答	4



「知りたい内容は含まれていたか」という問いは、参加者のほとんどが、【ほぼ含まれていた】か【大体含まれていた】と回答していた。(図3)

「疑問や不安は解消されたか」という問いは、妊婦では、【解消された】が22名、【解消されていない】が1名、未回答が3名であった。夫と祖母は、全員が【解消された】と回答していた。

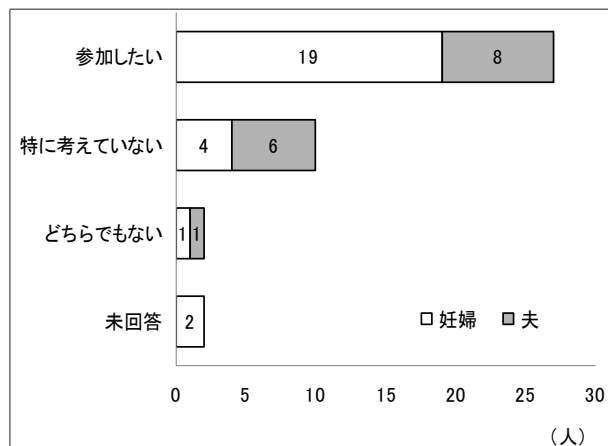


図4 将来サークル活動に参加したいか (n=41)

表3 行政やサークルへの意見・要望 (n=42)

(妊婦)	人数
未永い交流	1
行政で出産について改善してほしい	1
妊娠、出産にも保険が適用されるようになってほしい	1
どうしても人手がいない時に、面倒を見てくれる(ボランティア)サークルが近くにあるといい	1
必要となる分の費用等を少し安くしてほしい	1
情報交換の場があると楽しい	1
いろいろな不安が少しでも解消されるように情報がいつでも得られること	1
子どもの医療費無料の年齢を引き上げてほしい。保育園の数をふやしてほしい	1
子どもにかかるお金を市でもっと負担して欲しい、妊娠中にも、家事の手伝いをしてくれる人がいて欲しい	1
こんなこと聞いても大丈夫かな?と思うようなことも、気軽に聞けるような雰囲気がある機会が、たくさんあると嬉しい	1
初めての出産なので、まだよく分からない	1
今のところ特にない	1
未回答	14
(夫・祖母)	人数
特にまだ考えていない	3
双子の経済的支援制度	1
少子化対策に多胎出産へのメリットを加えて欲しい	1
育児サークルの充実や、職場での育児保障の環境を充実してもらう	1
このようなイベントが他にもあるとよい	1
色々な費用、サービス等の情報が欲しい	1
少子化が進行しているので、行政が少しでも子育てしやすい環境(金銭的)を整えて欲しい	1
未回答	7

「教室後の交流会についての意見・感想」は、回答者の多くが、交流会での話は参考になったと回答していた。(表2)

### 3. サークル活動について

「将来サークル活動に参加したいか」という問いは、妊婦の多くは、【参加したい】と回答していたが、夫は、【特に考えていない】という回答も多くみられた。(図4)

### 4. 行政やサークルへの意見・要望

妊婦、夫ともに経済的支援についての要望が多くみられた。(表3)

## IV. 考察

### 1. 行政との協働による多胎児教室開催

多胎妊婦とその家族を対象にした多胎児教室は、全国的にもまだ少なく、岐阜県においては、本報告で紹介する「双子のプレママパパ教室」のみである。今回、「双子のプレママパパ教室」を開催していく中で、行政、医療機関、サークルが協働して多胎妊婦とその家族を支援する必要性、多胎妊婦のニーズや多胎児教室の重要性が浮き彫りとなった。その中でも、教室開催にあたり、できるだけ多くの参加者を集めることが大きなポイントであった。教室開催に向け、A市保健センターが、近隣の4市に呼びかけ、それぞれの保健センターが協力し、参加者を募った。A市のみで対象者を募ったのであれば、これほど参加者は集まらなかったと考えられる。現在、多胎妊婦は増加傾向にあるが、岐阜県内の市町村単位で見ると、年に数例であり、ばらつきもある。したがって、それぞれの市町村で、定期的に教室を開催するのは、なかなか難しい。しかし、いくつかの市町村が協力し、参加者を募ることによって、参加者が確保でき、教室を開催することが可能になる。このように、行政同士が情報を共有し、協力し合いながら、支援を行うことが重要であろう。

また、教室開催3年目には、A市からの参加者が全くいなかったため、A市保健センターが主体となって行う教室のあり方について、疑問の声が上がった。そこで、A市を管轄するB保健所が取りまとめ役となり、A市を含める5市で構成されるD地区の多胎児支援の方法について、話し合う機会が設けられた。結果、今後も教室の開催は継続し、D地区が一つの単位となって教室を続行

することになった。また、D地区それぞれの保健センターが持ち回り制で開催していくことになり、その際、A市保健センターがモデルとなり、アドバイザーの役割を担うことになった。したがって、B保健所およびC保健所が管轄する5市が一つの単位となって、教室が開催されることにより、参加者の確保と、保健センター同士の頻繁な情報交換の実施につながった。D地区の5市は一つの医療圏であり、従来からB保健所、C保健所が母子保健対策における医療・地域の連携体制をすすめてきたことがこの土台としてあり、また、教室対象者である多胎妊婦の多くが、D地区の周産期医療の中核病院であるE病院で出産することから、E病院助産師を加えて、5市が一つの単位となって教室開催することに至った。

次に、教室開催に向けての取り組みには、行政、医療機関、サークルとの協働が不可欠であった。以前より、A市保健センターからのサポートを受け、E病院病棟への訪問を行っていた多胎児サークルの活動が、教室開催のきっかけとなったが、多胎児サークルより、行政へ投げかけられた多胎児支援の重要性やニーズが、教室開催を実現可能にした。それぞれのスタッフが専門とする分野を活かしながら、多胎妊婦とその家族を捉え、関わることによって、よりニーズに沿った支援が可能になった。

服部ら<sup>17)</sup>が、岐阜県の市町村と多胎児サークルを対象に行った研究では、多胎児サークルが望む行政の多胎児支援として、「保健師の助言」、「妊婦への関わり」、「育児相談」などが挙げられており、さらに、「行政と協働して支援に取り組みたいが、行政からの協力が得られない」ことが挙げられている。その一方で、行政が多胎児支援をしていくうえで困っていることとして、「多胎児支援に関する情報や支援のための知識が少ない」などの保健師自身の情報不足が挙げられている。また、行政として、多胎児サークルの支援については、対象者が少なくとも、支援の必要性があると認識していた。このような課題がある中、今回の教室では、行政とサークルの協働が実現し、それぞれのスタッフが専門性を発揮できる場であると同時に、多胎妊婦とその家族のニーズを捉えた教室であったと言える。さらに、教室を重ねていくうちに、スタッフの知識も得られ、サークルから行政への意見や要望を伝えやすくなり、スタッフ間の風通しも良くなっていった。

以上より、地域が基盤となって行う多胎児教室などの支援は、対象者にとって、自分が住む地域には、いつでも相談したり話を聞いてもらうことができる場所がある、という安心感につながっていると考えられる。一組一組の多胎妊婦とその家族に寄り添った支援を行うには、行政、医療機関、サークルなどがあらゆる方面から働きかけることも大切であるが、これらがお互いに情報を共有し合い、協働し支援することで、より、きめ細かい支援へとつながるであろう。

## 2. 参加者の教室に対する意見、および教室の有効性

参加者が、「教室の開催を知ったきっかけ」は、【保健センターからのチラシ】が最も多かった。これは、A市保健センターから他の4市の保健センターへの呼びかけにより、それぞれの保健センターが参加者を募ったためである。また、妊婦健診の際に、病院スタッフが紹介したことから、【病院で勧められた】と回答した妊婦も多かった。このように、できるだけ紹介する場や機会を設けたことが、より多くの妊婦への周知につながった。夫の回答では、【妻に誘われた】が最も多かったが、妊婦と夫1組での参加が多かったことから、妊婦のみならず夫も、多胎妊娠や育児についての情報を得ること、質問をする機会や場を望んでいたと考えられる。したがって、今後も、保健センターと病院、またサークルが協力して案内を工夫し、できるだけ、多くの参加者が集まるよう、さらに、妊婦と夫1組で参加できるよう、日程調整をしていくと良いだろう。

「教室に参加した満足度」については、参加者のほとんどが、【期待通り】か【まあまあ期待通り】と回答していた。「知りたい内容は含まれていたか」という質問には、参加者のほとんどが、【ほぼ含まれていた】か【大体含まれていた】と回答していた。また、「疑問や不安は解消されたか」という質問は、ほとんどの妊婦と、夫・祖母全員が【解消された】と答えていた。この教室のプログラムは、参加者同士、さらには参加者とスタッフが顔見知りになり、いつでも支援できる体制があると知ってもらい、安心して妊娠生活を過ごし育児期を迎えてほしい、という目的がある。また、教室に参加し、日常生活や、多胎妊娠に多いハイリスク管理や入院生活、育児期の具体的な過ごし方や工夫などの体験談を聞くことによって、イメージができ、またそのイメージが具体化す

するという効果が期待される。特に、当事者であった、既に育児期にある多胎児サークルメンバーからの体験談は、参加者が、本、雑誌、テレビやインターネットから得た知識や情報を、より具体化し、イメージしやすくする利点がある。妊娠期において、妊婦のみならずその家族は、育児のイメージがなかなか出来ず、育児の予想がしにくい<sup>18)</sup>と、言われているように、今後も、専門職からの知識や情報提供、多胎児サークルからの体験談などを組み入れて行っていくとよいだろう。

「教室後の交流会についての意見・感想」は、【色々な話が聞けて良かった】【生の声が聞けて参考になった】という意見が多くみられた。また、体験談や具体的な情報やアドバイスが参考になったという意見も多くみられ、教室のプログラムの最後に、和気あいあいと話す機会を設けたことは、よりイメージの具体化につながっている。他の回答で、【妊娠中のママだけの限定の方が話しやすいのではないかな?】という少数意見もみられた。これは、交流会に、先輩ママパパやスタッフも一緒に参加していたため、妊婦同士で交流する場面があまりなかったためだと考える。体験談や色々な情報を得ることも大切であるが、妊婦同士の交流によって、友達づくりにも期待でき、励まし合い、支え合う関係もできるであろう<sup>19, 20)</sup>。したがって、今後、妊婦同士が交流できる時間を設けると良い。

「将来サークル活動に参加したいか」という質問は、妊婦ではほぼ7割、夫ではほぼ5割が【参加したい】と回答しており、【特に考えていない】と回答した夫もややみられた。多胎児サークルに限らず、育児サークルへの参加は、女性の方が活発である傾向もみられ、男性は仕事で参加しにくい<sup>21)</sup>ことや、サークルは女性が集うものと考えている男性も多いかもしれない。しかし、比較的、【参加したい】と回答した夫が半分以上みられたことは、この教室が動機づけになり、育児への関心が高くなっていると考えられる。

「行政やサークルへの意見・要望」は、経済的支援が多く挙げられていた。実際、単胎と違って、経済的負担は大きく、忙しい生活リズムなどによって、育児に必要なものも違う。また、経済的な負担感の声も多く上がっている<sup>22)</sup>。現在、少子化対策で様々な公的サービスや経済支援がなされているが、多胎児支援に特化するもの

はない。したがって、できるだけ多く、このような意見を行政が吸い上げていく必要がある。

以上より、参加者からは、前向きな意見が多くみられた。したがって、教室の必要性が浮き彫りとなり、今後とも継続していくことが重要であると示唆された。

### 3. 今後の課題

今回、取り組んだ多胎児教室は、年に2回行っており、対象者にとっては、出産までに1回参加できるか、または、参加できない場合もある。そのため、その後の経過を把握するためには、妊娠中に行う多胎児教室での支援に留まらず、継続した支援を行っていくことが課題である。また、参加できなかった場合のフォローも考える必要があるだろう。現在、多胎児家庭や病院への訪問など、多胎児サークルによるピアサポーターの活動が活発になり、多胎児家族や多胎妊婦を支えている<sup>23)</sup>。こうした取り組みから得られた情報を、対象者の同意を得て、行政や医療機関と共有し、妊娠期から育児期にかけて、地域が主体となり、一連のフォローを行うことが重要である。

### V. まとめ

行政と医療機関、多胎児サークルが連携し、地域全体で多胎児支援に取り組んできた経過を振り返るとともに、多胎児教室の取り組みとその協働体制について考察した。また、多胎妊婦とその家族の教室に対する意見について調査した。教室の開催に当たっては、対象人数が少なく、単独の市町村のみで開催することは難しいため、保健所が管轄する単位で開催することが重要であると考えられる。また、行政と医療機関、サークルが協働して開催することにより、情報の共有ができ、参加者にとっては、より具体的な情報が伝わり、多胎妊娠と育児のイメージもしやすくなることが裏付けられた。今後、多胎児教室での支援に留まらず、育児期まで一連のフォローを行うための協働体制について、検討する必要がある。

### 謝辞

本研究に快くご協力いただきました妊婦の皆様とその御家族の方々にお礼申し上げます。また、教室の開催にあたり、ご協力いただきました県立多治見病院の田口由紀子様、福士せつ子様、小木曾美喜江様、多治見市保健

センターの桜井きよみ様、日置富佐子様、東濃保健所の田中圭子様、そして、多胎児サークル みど・ふあどの皆様に深く感謝申し上げます。

## 文献

- 1) 財団法人母子衛生研究会：単産・複産（複産の種類）にみた年次別分娩件数及び割合（平成7年～平成18年），母子保健の主なる統計，母子保健事業団；58，2007.
- 2) 前掲 1) 57.
- 3) 佐藤郁夫：双胎妊娠・分娩管理マニュアル，産婦人科の実際別冊；31-33，金原出版株式会社，2005.
- 4) 服部律子：乳児期の双子を持つ母親に関する分析と考察，ペリネイタルケア，21(8)；78-84，2002.
- 5) 藤原由美子，藤原由美，須山由梨子：多胎児をもつ母親の育児に関する産前・産後の悩み事，日本看護学会論文集 母性看護，35；137-139，2004.
- 6) 尾前沙織，谷 尚子，安代晋吾，他：双生児を育てる母親の生活実態の検討，藍野学院紀要，19；59-66，2006.
- 7) 服部律子：双子の母親の育児不安に影響する要因－不妊治療と育児の実態－，母性衛生，48(1)；38-46，2007.
- 8) 前掲 7).
- 9) 芦田慎子，原田由紀：双胎の育児をする母親を支える要因－双胎と単胎の母親に対するアンケート調査を比較して－，日本看護学会論文集 母性看護，35；134-136，2004.
- 10) 服部律子，谷口通英，堀内寛子，他：多胎児支援の方法に関する研究，平成17年度 岐阜県立看護大学 共同研究報告書；71-76，2006.
- 11) 名和文香，服部律子，谷口通英，他：多胎児支援の方法に関する研究，平成18年度 岐阜県立看護大学 共同研究報告書；69-74，2007.
- 12) 名和文香，服部律子，谷口通英，他：多胎児支援の方法に関する研究，平成19年度 岐阜県立看護大学 共同研究報告書；79-84，2008.
- 13) 丸山由美，笠原祐子，木村久代，他：多胎妊婦出産育児教室への試み，神奈川母性衛生学会誌 7(1)；56-59，2004.
- 14) 末原則幸，濱中拓郎，中川美紀，他：周産期センターにおける多胎外来と多胎教室の運用，産婦人科の進歩，56(3)；356-358，2004.
- 15) 服部律子，堀内寛子，清水智美：岐阜県内の多胎児支援の現状と課題，岐阜県母性衛生学会雑誌，31-32；135-140，2004.
- 16) 服部律子，布原佳奈，名和文香：地域における行政と育児サークルが協働で行う多胎児支援，岐阜県立看護大学紀要，7(1)；29-35，2006.
- 17) 前掲 15).
- 18) 藤井美穂子：双子を持つ母親の退院後1ヵ月間の育児体験，日本助産学会誌，20(2)；77-86，2007.
- 19) 前掲 13).
- 20) 前掲 14).
- 21) 島田伸世：子育てに地域の底力を発揮する，助産雑誌，58(7)；26-30，2004.
- 22) 多胎育児サポートネットワーク：多胎育児支援地域ネットワーク構築事業報告書，独立行政法人福祉医療機構，2007.
- 23) 前掲 22).

(受稿日 平成20年11月10日)

(採用日 平成21年1月28日)